

言葉の歩みをたどる

第20回国際歴史言語学会から

世界の言語の歴史や変化について議論する第20回国際歴史言語学会が7月25～30日、大阪府吹田市の国立民族学博物館で開かれた。アジアで初めての開催となった今回、ワークショップ(分科会)・シンポジウムのテーマに初めて「手話」と「日本語の起源」が取り上げられた。それぞれについて2回にわたり報告する。

【佐々木泰造、写真も】

■手話



アメリカ手話、日本手話、英語、日本語の4言語同時通訳で議論された国際ワークショップ「手話の歴史言語学」—大阪府吹田市の国立民族学博物館で7月28日

言語としての奥深さ

①

歴史言語学は言語が歴史的にどのように変化してきたか、その要因は何かを研究する。比較言語学とも呼ばれ、主として印欧語族の諸言語を比較して系統関係などを論じてきた。学会の参加者も印欧諸語の研究者が多いが、最近では他の語族の研究者も増えている。今回は特に語族の垣根を越えて議論するようプログラムが組まれた。その一つが一般公開の国際ワークショップ「手話の歴史言語学」だ。

手話は単なる身ぶりではなく、文法をもった言語だ。地域によって異なり、多くの言語、方言がある。米ロチェスター大学の歴史言語学だ。この100年余りの変化を、神田さんは三つに分類した。「千」のように世代とともに変わっていく漸次変化の輪を作る。

豊かな地域色、抽象概念

1大のテッド・スパラ准教授は、手話が各地域の文化や音声言語の影響を受けつつ独自に成立したことを説明した。日本手話では親指を立てて「男」、小指を立てて「女」を表現する。日本でよく使われる身ぶりから借り入れた表現だ。手話は手の形、位置、動きという三つの要素で構成される。日本手話では性別は手の形の違いで表されるが、アメリカ手話ではそうではない。地域による差異だけでなく、時代による変化もある。神田和幸・中京大教授が日本手話の過去と現在を比較した。これまで日本手話の辞書は

1963年の出版が最古と考えられていたが、最近、佐土原秀彥編『聾啞教授手話法』という手話辞書が1902(明治35)年に私立鹿児島盲啞学校から発行されていたことがわかった。約540語について説明があり、数字の1000は、漢字の「千」を宙に書くよう示されている。現在、鹿児島県の高齢者はこの表現を使っているが、若い世代は指で三つの輪を作る。

に表す手話が多い。香港中文大手話文化研究センターのジェームズ・C・ウッドワード所長は、東南アジアでは一つの国にいくつもの手話言語があり、多くが絶滅の危機にあることを報告した。政府が標準手話に統一しようとしており、それ以外の手話を学校で教えないためだ。

これは聾者の文化、歴史の破壊だとウッドワードさんは言う。大学のセンターのプロジェクトで、アジア太平洋地域の手話辞書を作るプランを立て、聾者が手話を文書化する手助けをしている。

佐々木大介・武蔵野大准教授によると、日本手話の話者は台湾や韓国の手話がある程度わかる。植民地時代に日本手話が導入されたためだ。日本では簡素化するなど形を変えた手話が、台湾や韓国では古い形のまま残っている。手話言語は他の手話言語や音声言語の影響を受けつつ、それぞれ独自に変化している。この会議では、スパラさんと大杉さんがアメリカ手話、他の人が英語で発表した。言語学の専門用語も飛び交ったが、会場とのやり取りを含め、すべてアメリカ手話、日本手話、英語、日本語の4言語で同時通訳された。高度な抽象概念も表現する手話の、言語としての奥深さを感じさせる議論だった。

訂正 5日の「言葉の歩みをたどる①」で、大杉豊さんがアメリカ手話で発表したとあるのは誤りでした。大杉さんはアメリカ手話で司会し、日本手話で発表しました。